

## 預言者ムハンマドを語る



### ■ 「預言者ムハンマドを語る」より

- ◆ 訳者より挨拶
- ◆ 夜明けが待たれていた
- ◆ 夜明け前の闇
- ◆ 預言者として活動する以前の彼の生活について
- ◆ 彼がされた旅行
- ◆ 皆そのお方を待っていた
- ◆ なぜ彼らは信じなかったのか
- ◆ 預言者に関する吉報
- ◆ 預言者は人間のあり方を解明するために遣わされた
- ◆ 預言者は人間をアッラーへの奉仕へと導くために遣わされた
- ◆ 預言者は人間にアッラーの法を教えた
- ◆ 預言者は模範であった
- ◆ 預言者はこの世と来世との均衡を確立された
- ◆ 預言者はアッラーの証人であった
- ◆ 全てアッラーに従う
- ◆ 見返りを求めない
- ◆ 純正である
- ◆ 素晴らしい中源
- ◆ アッラーの唯一性への呼びかけ

### ■ 著者について

アッラーはこの世界と人間を創造したままで放っておきはしませんでした。人間の心には欲望や悪い性質があるので、自然のままに正しく導かれるということはありません。そこでアッラーは人間を導くために、それぞれの時代にそれぞれの民族と地域に、人間の間から預言者と呼ばれる人を選び、彼らを通じて人間の生きる道を教えました。預言者とは「神の言葉を預かる者」という意味です。預言者は哲学者や思想家などとは違い、自分で宗教を考え出したわけではありません。また、自分で修業して預言者になれるわけではありません。昔からさまざまな預言者たちが送られて、さまざまな時代やさまざまな民族にアッラーの宗教をもたらしましたが、時代が下るにつれて間違いや悪意、思い込みや善意などから人間が勝手に宗教を変え、もとの教えと違ったものにしてしまいました。アッラーはこれらを正すため、最後の預言者としてムハンマド(彼に平安あれ)を送り、最後の完全な宗教としてイスラームを下したのです。

ムハンマド(彼の上に平安あれ)は西暦 570 年にサウジアラビアのメッカに生まれ、預言者に選ばれる前から誠実で高潔な人として認められていました。彼の人生は充実しており、彼がわざわざ人々に異を唱える必要はなにもありませんでした。しかし 40 歳のとき、アッラーが彼を預言者として選んだため、彼は全人類を導くという偉大な仕事の苦難の道のりに進むこととなったのです。預言者として選ばれて後、彼はメッカで 13 年間布教し、その後マディーナに移住してから 10 年間活動し、63 歳でその生涯を終えました。

ムハンマド(彼の上に平安あれ)はただ単にアッラーの言葉を述べ伝えただけではなく、その教えを自ら実践しました。そうしてイスラームが単なる理想ではなく、実践の宗教であることを身をもって示したのです。そこで彼の実践のことを「スンナ」と言い、ムスリムが模範とすべき指針とされています。「ムハンマドはアッラーの使者である」とは、ムハンマド(彼の上に平安あれ)をアッラーの使いであると認め、彼の生き方(スンナ)を自分の手本として受け入れるという意味です。

本書を注文したい方は、オンラインストアをご利用ください。

## 預言者ムハンマドを語る

### 訳者より挨拶

イスラームは、本来テロや紛争などで象徴されるべき存在ではありません。しかし、特に最近、テロや紛争と結びついた形でイスラームが報道されることが多いのが現状です。

私たちがイスラームの本来のあり方を知ろうとした時、こういった報道などから見えてくるものだけを追っている限り、そこから学べるものは非常に限られた内容になってしまうと思います。イスラームは、世界の人口の五分の一が信仰している教えです。それだけの人が、単にテロや紛争で象徴できるような教えを信仰していると考えるのは無理があるのです。

イスラームの本来の姿を知る上で、大きな手がかりとなるのがイスラームの預言者ムハンマドについて知ってみることだと思います。彼らは生きるうえで、多くの点において、預言者ムハンマドを模範としています。彼らが模範としている人とはどのような人物だったのか。イスラームはどのような状況にもたらされたのか、この教えはどのように伝えられたのか、どのように広められていたのか、これらを知ることによって、本来の姿のイスラームというものが見えてくるのではないかと思います。

日本でもこれまで、イスラームを知る為の本がいくつか出されてきましたが、今回は、イスラームの国では預言者がどのように語られているか、という視点から、ある本を紹介してみることにしました。

毎週金曜日にモスクで、ある高名な男性が、イスラーム教徒たちに、預言者ムハンマドについて語っています。その言葉からは、イスラーム教徒の預言者に対する認識、感情、そしてイスラームの歴史の断片、イスラームのあり方などが読み取れます。これらは日本での報道などからでは見えてこないものです。でも、本当はイスラームを知る過程での最も基本的な段階でもあると私は思うのです。

この男性は、フェトゥフツラー・ギュレン氏という方で、彼は現在かなり重い病気であるということが知られています。この方は、生涯結婚されませんでした。多くの書物、カセットなどが出されましたが、そこから得たお金で貧しい生徒達に就学の機会を与えられ、イスラーム社会の改善、異なる宗教間の対話の促進などに努められてきた人です。この方のそういった活動は欧米各国で高く評価されています。宗教的知識に留まらず、歴史、経済、法律、さらには科学といった分野においても深い教養を持っておられる方だということが、その書物からも伝わってきます。

こういった理由で、この本を皆さんに紹介したいと思い、このたび無事翻訳を終えることができました。皆さんがイスラームについて興味を持った時に、少なくとも情報を得る、という点で、ささやかでもお手伝いできれば幸いです。

注 ムスリムは預言者ムハンマドの名前を聞くときと尊重の意味で[サッラーフ アライヒ ワ サッラム]「彼の上に平和と平安があれ」と唱えますが、この翻訳文ではそれを短縮形で示しています。

## 夜明けが待たれていた

キリスト教には次のような信仰がある。彼らは、聖イサー(イエス)は人間の原罪が許される為に、神によって犠牲とされたという信仰をもつ。キリスト教において神は、献身的行為をされ、人を許す為に自らの息子(私達の信じる限り、あり得ないことであるが、)であるメシアを犠牲とされた。それでイサーは、(彼らによると)十字架にかけられた。このようにして、聖アダムから始まる全ての人間が生まれながらにして背負っている原罪が許されたというのである。私たちにとってこれは信仰上の誤りである。

ただし、この誤った認識は一部だが真実を語ってもいる。すなわち、神は、人々の罪を許す為、彼らを過ちや逸脱、荒々しさの中に放置しておかない為に、最も愛される僕を、聖ムハンマドを、彼がどのような目にあうかを知られながらもなお、預言者として遣わされたのである。人々が道で迷い、そうして失われてしまわないように、人間性を持ち、それぞれが人として完全であるように、内面性を深め、常にアッラーを感じる事ができるように。そして、イブラーヒーム・ハックの表現を借りるなら、彼らの神をその良心の宝と見なせるように。

「アッラーはこの世界に収まりきる事は決してないと語られたしかし信仰する者の心には収まり得ると。」

心というのはそういうものであり、この世界に収まりきる事のないアッラーは常に、貴重な鉱山のようにそこで自らの存在を感じさせられるのである。

本、知識、思考、哲学、天地、何もかもアッラーを把握することはできない。彼を語りつくすことはできない。ただ、心は、一部であれその説明をなし得る。心は言葉であり、かつて耳はその心の言葉による説明ほどに輝かしい語りを聞いたことはなかったのである。

だから人は、その心において道を探り、何かを求めるときはそこで求め、神に至る為に努めなければならない。アッラーが、預言者聖ムハンマドを遣わされたのはその為なのである。

そう、彼は、人々の元に、アッラーの章を読誦し、奇跡を彼らに示し、人々に人間が何であるかを教える為に来られたのである。彼のおかげで人々は穢れから逃れ、清められ、肉体的罪から救われて精神的生き方をしよう高められるはずであった。そして、高められたのである。彼は人々に書と神意を教えられ、人々もそれらがもたらす光によって目覚め、永遠の道へと入っていくはずであった。そして、結果としてそれが実現したのである。

私たちにとって非常に重要な、恵みに満ちた日がある。そのいくつかは信者たちの祝日とみなされる。毎週金曜日に味われる喜びの何倍もの喜びを、犠牲祭や断食明けの大祭で私たちは味わう。犠牲祭とは、聖イブラーヒームが明らかな意識を持って犠牲を払おうとした日であり、ムスリムたちが罪の許しを心から願い、またその為に一部の人々がベイトウラーにひれ伏し、アラファトに滞在し、預言者の魂と共に伏して祈る日である。断食明けの大祭は、一月の断食によって神に近づいたという喜び、生きていることの喜びを分かち合うという意味をもつ、豊かな祝祭日である。ただ、もう一つの祝日が存在する。それは全ての人間の、さらには存在するもの全ての祝日とみなすことができるものである。すなわちそれは、預言者がこの世に遣わされ、我々の中に下られ、我々に名誉を与えられた日である。預言者ムハンマドの生まれられた日である。

つまり、アッラーが太陽のように創られたその光を、灯明のように私たちの世界にかかげられた日である。そう、その光の

おかげで無知の闇は打ち破られ、世界は光に満ちたのであった。これは、アッラーがジンと人間に下された最大の恵みであり、恩恵である。

## 夜明け前の闇

誤った見地から物事が判断される時代が、ジャーヒリーヤ「無明時代」と呼ばれるものである。天と地の光であるアッラーへの信仰が人の心を捉えないことによって、魂や良心は漆黒に染められる。このような心や魂で物事を判断すると、近視眼的になったり、曖昧になったりする。人々は暗い時代を、こうもりのように生きるのである。

偶像を崇拜すること、あるいは人を神格化すること、あるいはこの世の創造を偶然で物質的な原因から起こったものと見なすこと、これらは全て闇である。このような共同体の、精神的、社会的、さらには経済的、科学的な状態は、聖クルアーンで次のように述べられている。

「また、不信心者の状態は、深海の暗黒のようなもので、波が彼らを覆い、その上にまた波があり、その上をさらに雲が覆っている。暗黒の上に暗黒が重なっている。彼が手を差し伸べてもそれらはほとんど見られない。アッラーが光を与えないものには、光はない。」(御光章24/40)

「真理から離れては、そこに虚偽以外何があるか。あなた方はなぜ背き去るのか。」(ユースス章10/32)

預言者ムハンマド(彼の上に平安あれ)は、この、人々が真の宗教について知識をもたなかった時代に、そしてそれ故に多くの偶像を崇拜していた時代に、現されたのである。聖クルアーンに次のように述べられているように。

「彼らはアッラーの外に、彼らを害せず、また益のないものに仕えて、『これらの神々は、アッラーの御前でわたしたちをとりなすものです』(ユースス章10/18)

彼らは石や、土、パン、チーズさえも使って偶像を形作り、言う。「チーズは我々と神との仲裁である。」彼らは思考と道義において、非常に墮落していた。アブー・ダル・ギファリが次のように報告しているほどである。「彼らは食事時になると座り、彼らの偶像を切り分け、食べる。」

「彼らに、アッラーが啓示されたところに従え、といえば、彼らは、いや、私たちは祖先の道に従う、という。」(雌牛章2/170)

彼らは女兒が生まれると生きたまま埋めた。聖クルアーンに次のように述べられている。

「彼らの一人に、女兒の出生が知らされると、その顔は終日暗く、悲しみに沈む。彼らが知らされたものが悪い為に、恥じて人目を避ける。不面目をしのんでそれを抱えているか、それとも土の中にそれを埋めるかを思い悩む。」(蜜蜂章16/58-59)

イスラーム以前のアラブだけではなく、ローマやササン朝においても、女性たちは軽蔑されていた。聖クルアーンでは、はっきりと、このことについて彼らが問われるであろうと宣言している。

生き埋められた女兒が、どんな罪で殺されたのかと問われるとき、(タクイール章8-9)

ムハンマドが預言者であることを明らかにされた後、ある時一人の教友が彼のところにきて、自分が幼い娘に対して行ったことについて述べた。

「ああ、神の預言者よ。私には娘がいました。ある日私は彼女の母親に、おじのところに連れて行くから服を着替えさせるようにといました。哀れな母親は、それが何を意味するかを知っていました。しかし彼女は、それに従い、涙を流すしかなかったのです。妻は、おじのところにいくという知らせに喜んでいて幼い子に服を着せました。私は彼女を井戸の近くに連れて行き、中を見るように言いました。彼女が中をのぞきこんでいるとき、私は彼女をけり落としました。彼女は井戸のふちにつかまり、もがきながらも、お父さん、服に砂がついてると私の服をきれいにしようとしていました。にもかかわらず、私は彼女をもう一度けり、彼女を生きたまま埋めてしまったのです。」

彼がこれを説明している時、預言者(彼の上に平安あれ)はまるで最も親しい身内を失われたかのようにすすり泣かれていた。近くにいた者が、「預言者を悲しませたのだ！」と言ったが、預言者は「もう一度説明しなさい」と言われた。再び説明がなされた。預言者の目から流れ出る涙が、そのひげをつたった。神の預言者は繰り返し説明させることによって、次のようなことを説明されようとしたのであろう。

「そう、あなた方はイスラームを知る以前はそのようだったのだ。イスラームがあなた方に獲得させた人間性をもう一度認識しなさい。」

この時代には、毎日のように罪もない女兒を生き埋めにするための穴が砂漠のあちこちで掘られていた。人間はハイエナよりも残忍で残酷だった。力の強い者は弱い者を押しつぶした。野蛮こそさが人間性だとされ、残酷なことが喜んで受け入れられ、血に飢えた者たちが価値を認められ、流血は高貴なものと考えられていて、姦通や私通は合法的な結婚よりも一般的なものであった。家族構成はすでに破壊されていた。多くの者は自分の父親を知らなかった。

ちょうどその時期に、彼、すべての被造物の存在する理由であられる彼は、人々のところから遠ざかり、後に「光の山」と呼ばれることになるヒラーの洞窟にこもられていた。その目は地平線で、救いの日の出を待ち望まれていた。地に伏して祈られ、何時間も願いつづけられ、神から人々のための救い主が遣わされることを望まれていた。ブハーリーやムスリムのハディース集の中でこの出来事が語られる時、「自らを崇拜行為にささげること、人々から遠ざかること」という表現が使われる。預言者ムハンマドは時には何日もマッカに戻られず、そこに滞在されていた。食べ物が尽きたときにだけ戻られ、足りるだけの食べ物を準備されて再び出かけられるのであった。

この時代のこのような現状を制止する何か求められていた。そして預言者の登場によって、これらは変化したのである。無明時代と土地は、聖ムハンマドのもたらした光によって、バラの花束になった。のちに、移住の際、マディーナの住民たちが彼を迎えた際、このような歌で気持ちを表した。

「ベダーの丘から月がのぼった。アッラーのお招きに、私たちは感謝しなければならない。」

## 預言者として活動する以前の彼の生活について

### 信頼のおける人

預言者ムハンマドの子供時代、若者時代、そして壮年期はみな、預言者として活動する為の礎石であり、到達する為の階段のようなものであった。だからこそ、彼を知る者はみな、彼が神の言葉を伝え始めるや否や彼を信じ、従ったのである。

彼は人生において一度も嘘をつかなかった。そのような彼が、アッラーについて語り、自分が預言者であることを述べたのである。どんな小さなことについてさえ、偽りを述べなかつた人が、これほど大きく重大な問題について嘘がつけるだろうか。不可能なことである。当時の人々はこのように考えたのだ。全員ではなかつたとはいえ、意地や羨望にとらわれなかつた人は皆すぐに、信仰し始めた。彼が生きた時代は、ジャーヒリーヤー無明時代であった。しかし彼自身はジャーヒリーヤに似つかわしくない生き方をしていた。彼は信頼できる人だった。皆彼をそのように評価していた。例えば、旅に出なければならぬとき、妻をどこかに預けなければならぬとしたら、全く心配することなくムハンマドに預けることができるだろう。戻ってくるまで、彼女をちらっとでも見ないであろうということが全く何の疑いもなく、信じられるからである。あるいは、財産を誰かに預けなければならぬときも、安心して彼に預けられるだろう。

預言者としての初期の時代に、ムハンマドはクライシュ族の人々とともに、アブ・クダイシュの丘で集っていたとき、彼らに尋ねた。「この丘の向こうに、敵が我々を攻撃するべく待ち構えているといたら、皆さんは信じますか」皆、信じますと答えた。彼にとって最も手ごわい敵となる、彼のおじのアブー・ラハブでさえ、そう答えたのだった。

彼はまだ母の胎内にいるときに、父を失った。5～6歳のとき、母をも失った。祖父のアブドゥルムツタリブに引き取られたが、8歳になったころには祖父も世を去った。彼は彼の全ての信託を神に置いて、そして完全に神に自分自身をゆだねなければならなかつた。父親の死によって、神は彼から全ての人間からのサポートを取り除くとともに、神のほかには彼には全くパートナーがいないのだという認識を彼に与えた。彼は祖父やおじの保護をある程度は受けることができたが、彼の本当の保護者が神であることはわかつていた。全ての現象の背後に、そして全ての出来事やその結果に、彼は全世界の唯一の創造主を知ることができた。

### 彼は孤児として育った

ムハンマドは孤児として育った。孤児であるということがどういうものか知っていたからこそ、慈愛あふれる父親のように振舞った。貧しさを味わったからこそ、支配下の人々の状態を配慮し、それにより振舞った。預言者の道徳心のなかでも、孤児と貧者に手を差し伸べ、彼らに目をかけるという心は、彼自身が育った環境にはぐくまれたものである。

「かれは孤児のあなたを見つけられ、庇護なされたではないか。かれはさ迷っていたあなたを見つけ、導きを与え、また貧しいあなたを見つけ、裕福にされたではないか。だから孤児を虐(しいた)げてはならない。請う者を撥(は)ね付けてはならない。」(朝章93/5-6、8-10)

彼は父を失うだけではなく、早い年齢において母をも失った。マディーナにある父親の墓を訪れた帰りにアブワの村で、25歳か26歳でなくなった。彼はたったの6歳であった。彼は父親、母親なしで残される痛みを学んだ。彼は人々に全てを教え、又あらゆる面で手本となる為に、まずご自身が何もかも経験しなければならなかったのである。

### 祖父のもとで

預言者ムハンマドが両親を失ったとき、彼の祖父でマッカで尊敬されている年長者のアブドゥル・ムッタリブが彼を守った。そのため、神はこの祖父をあらゆる不幸から守った。彼は最愛の孫を抱きしめ、いつでも彼の家で名誉ある席につかせた。彼は孫が人々を救うべく成長するだろうと感じていた。預言者ムハンマドはそれほどまでに気高く礼儀正しかった。一族の祖先であるカーブ・イブヌル・アツユに（一部の人によって彼も預言者だったというふうに考えられているが）最後の預言者が自分の子孫から現れるであろうことを予測していた。彼は名指しで言及していた。

「突然、預言者ムハンマドは現れるであろう。彼は便りをもたらし、そして彼の便りは真実である。」

預言者ムハンマドの高潔なる祖父は、アブラハの偉大な軍隊でさえ涙を流させることはできない人物であったが、臨終のときひどく涙を流した。息子のアブー・ターリブがわけを尋ねると、こう答えが返ってきた。「私はもうムハンマドを抱きしめられないだろうから泣いているのだ。」彼は付け加えた。「何かがムハンマドの身の上に起こるかもしれないと恐れて泣いているのだ。お前にあの子を託す。」

### 叔父アブー・ターリブの庇護

アブー・ターリブは約束に従った。預言者ムハンマドを40年近く庇護（ひご）し、援助した。彼のこの善行は、そのままにはされなかった。アッラーは、彼に、アリーのような子を授けられた。預言者たちの子孫は皆彼ら自身からなるものだが、預言者ムハンマドの子孫はこのアリーから続いている。アリーは全ての聖人の中で最も偉大で、最後の日があるまでその代表とされている。これは、預言者ムハンマドを助けたことに対してアブー・ターリブに与えられた報酬である。

## 彼がされた旅行

預言者ムハンマドはアブー・ターリブによって守られ最大の保護を受けられた。イブン・イサクなどの歴史家や伝記作家によると、アブー・ターリブは彼の甥が10歳か12歳のころ、貿易キャラバンでシリアに連れて行かれた。彼らはダマスカス付近のある場所で止まり、預言者ムハンマドが一番年下であったから、キャラバンを見張っているように言った。キャラバンはその時近くの修道院の修道士から注意深く観察されていた。その者は、最後の預言者の到来を、期待していた。バヒラという名のこの修道士は、雲がキャラバンの後についてきて、キャラバンが止まったときには止まり、それが動き出すとそれについて動き、彼らの頭上に影を作っているを見た。これは預言者の特徴だ、このキャラバンの中に待たれている預言者がいるに違いない、とバヒラは考えた。キャラバンが修道院の近くで泊まったとき、バヒラは彼らを食事に招いた。彼は、雲がまだキャラバンを覆っているのに気づいた。



彼はアブー・ターリブに、誰がキャラバンに残っているのかとたずねた。アブー・ターリブは、小さな少年がキャラバンを見張る為に残っているだけだと答えた。修道士は彼を連れてくるように頼んだ。ムハンマドがきたとき、バヒラはアブー・ターリブを端に連れて行き、その少年との関係を尋ねた。私の息子だとアブー・ターリブは答えた。バヒラはこれに異議を唱えた。「あなたの息子であるはずはない。我々の本によれば、彼の父親は彼が生まれる前に死んだに違いない。」それから付け加えた。「アドバイスさせてほしい。この子を連れてすぐに戻りなさい。ユダヤ教徒はうらやんでいる。もし彼らが彼を認めたら、彼に危害を加えるだろう。」アブー・ターリブは他のメンバーに弁解して、甥とともにマッカに帰った。

バヒラは正しかった。ただ知らないことがあった。ムハンマドは「アッラーは(危険をなす)人々からあなたを守護なされる。」(食卓章5/67)に言われるようにアッラーによって守護されていた。

預言者の二度目の旅行は、25歳の時だった。この時は奥様ハディースが派遣したキャラバンについての旅だった。当時彼女とは共に仕事をされていたのである。この旅行でも、バヒラと出あった。彼はかなり年をとっていた。預言者を見て大変驚いた。なぜなら彼はこのような日がくることをずっと待っていたのである。預言者に、「あなたは預言者となるであろう。ああ、私もその時まで生きられればいいのだが。そしてあなたにつかえることができればいいのだが」といった。彼はその日を見ることはなかった。だがこの行為が、天国における彼の地位をよいものにすることは間違いないことであろう。

## 皆そのお方を待っていた

### ザイド・ビン・アムル

預言者ムハンマドを待っていたのは、一人や二人ではなかった。ザイド・ビン・アムルもその一人だった。彼は教友(サハーバ)の一人、サイド・ビン・ザイドの父であり、ウマルのおじでもあった。この人は、偶像から顔をそむけ、何の効果も害もないことを主張し、預言者の登場にわずかに間に合わず世を去った。彼は「私は知っている、その人の登場は近い。その影はもう我々に届こうとしている。ただし、私がおその日まで生きていられるかどうかはわからない」と言っていた。彼は唯一のアッラーの存在を信じていたが、どのように礼拝行為をすればいいのか知ることはできなかった。アミル・ビン・レビアは、このように伝えている。

「ザイド・ビン・アムルから聞いたことである。ある日こんなことを言っていた。

『私はイスマエールの、そしてアブドゥルムッタリブの血統から現れるであろう預言者を待っている。その日まで生きることができるとは思わないが、信仰し、確かに認めている。彼は真の預言者である。もしあなたの寿命が彼に間に合えば、私からよろしく伝えてほしい。それから、君に伝えておこう。驚いてはいけぬ。』と言った。私が『どうぞ、説明を』というと、彼は続けた。

『背は中くらいである。高くもないし低くもない。髪は、完全にまっすぐではないし、縮れてもいない。アハマドという名であろう。生まれるのはマッカである。預言者となるのもここである。ただしその後、彼のもたらされるものを気に入らない者たちが、彼をマッカから追い出すだろう。彼はマディーナに移る。そしてその教えをそこで広めるだろう。私はあちらこちらを訪ね歩き研究し、イブラーヒームの教えを探した。私が話をしたキリスト教徒もユダヤ教徒も皆、あなたが探している人は後ほど現れるだろうといていた。皆最後にこういつて締めくくった。彼は

最後の預言者であり、彼の後には預言者は現れないだろう。』

アミル・ビン・レビアは続ける。

「それから月日はたつて私はムスリムになった。アッラーの預言者に、ザイドが言っていたことを伝えた。彼からの挨拶を伝えると預言者は姿勢を正してそれを受けられた。そして言われた。『私はザイドが天国で歩いているのを見た。』」

### ワラカ・ヌーフアル

ワラカ・ビン・ネブフェルはキリスト教徒の学者だった。預言者の妻ハディージャの親戚でもあった。預言者に最初の啓示が下り始めたころ、ハディージャは何が起こっているのか知るために彼のもとにきたことがあった。そしてワラカからこの返事を得た。

「ハディージャよ。彼はいつも正しいことを言う人だ。彼が見たものは、預言者がその初めに経験しなければならないことなのだ。聖ムーサーや聖イーサーにも同じものが訪れた。近いうちに、彼は預言者となるであろう。私もその日まで生きられれば、必ず彼を信じて、その教えの信者になろう。」

### アブドゥラー・ビン・サラーム

アブドゥラー・ビン・サラームはユダヤの学者だった。イスラームの入信について、彼自身の言葉から引用したい。「預言者がマディーナに移住した時、皆と同じように私も見に行った。その周囲にたくさんの人がいた。その中に入り込んだとき、彼の言葉が聞こえた。「あなた方にところにやって来た人たちに、あいさつをし、食事を与えなさい。」その言葉の不思議な力と深い意味に私は衝撃を受けた。その場で入信しムスリムになった。なぜなら、彼に、預言者にしか見られない顔を見たからである。」アブドゥラー・ビン・サラームは重要な人であった。彼が聖ユースフの子孫だった。彼については、聖クルアーンでも触れられている。

「言うてやるがいい「あなた方は考えてみたのか。もし、(聖クルアーンが)アッラーの御許からであり、それをあなた方は拒否し、しかも、イスラエルの子孫の一人がそれ(ムーサーの律法)と同じものであると立証し、それで彼自身聖クルアーンを信じたのに、あなた方は(なお)信じなかったとすれば。(あなた方は不義の徒になるのではないのか)」(砂丘章46／10)

この章でふれられているイスラエルの子孫の一人というのが(一部の学者が聖ムーサーだと言うが)アブドゥラー・ビン・サラームであると大部分の学者が言う。

### サルマーン・ファーリシィ

サルマーン・ファーリシィも、証人の一人である。彼は以前拝火教徒であった。しかし、真実の教えを求めていた。その後キリスト教に出会った。教会に通い出した。慕っていた司祭の死に際には、彼に今後どの誰にしたがえばいいのかをたずね、その勧めに従って、勧められた人に従った。このようにして、多くの人のそばで学ん

だ。ある時、最期のときを迎えた一人の司祭に同じことをたずね、彼からこのような答えを得た。

「わが子よ、もはや君に推薦できるものは誰も残っていない。ただ、最後の預言者の到来の時が近づいている。彼はイブラーヒームの教えにあるとおりに現れるだろう。彼が移住した、マッカから現れるだろう。その後、他の地に一度移り、そこに住むだろう。これは確かなことだ。行くことができるなら、そこへ行くといい。彼はサダカを受け取らない。贈り物は認める。二つの肩の間に、預言者であることの印がある。」

これ以降は彼自身の言葉から引用しよう。

「私の司祭が教えた地へ行く為、私はキャラバンを探した。キャラバンと交渉し、お金を払ってそこへ連れて行ってもらうことになった。しかし、アル・クラの谷で、彼らは私に暴行を加えた上、奴隷としてユダヤ人に売り渡した。その後、他のユダヤ人がきて、私を買った。そしてマディーナへ連れて行った。私はそこでナツメヤシの農場で働き始めた。預言者について何の情報も得られなかった。そんなある日、私は木に登ってナツメヤシを採っていた。私の持ち主であるユダヤ人も木の下で座っていた。そこへ、彼のいとこであるユダヤ人がやって来た。いまいましい様子で、

『なんてことだ。みなキュバへ向かっている。マッカからきた男が、自分を預言者だと宣言したらしい。皆、真に受けているらしい！』といった。私は緊張の余り震え出した。もう少しで、木の上から持ち主の上に落ちるところだった。急いで木から下りて、

『何と言いましたか？何と言いましたか？どういうことですか？』とたずねた。持ち主は私が取り乱しているのに怒り、私を強く殴り、『お前に何の関係がある。自分の仕事をしている』といった。

『興味があっただけです』と私は言って、再び木に登った。

その夜、私は全ての荷物をまとめてキュバへ発った。預言者は、教友たちとともに座っておられた。

『あなた方は貧しい方のようにお見受けします。私はちょうどサダカをする相手を探していたのです。これをあなた方に差し上げます。どうぞ食べてください』と私は言った。預言者は、そばにいる者たちに、『あなた方がお食べなさい』と言われ、決してそれに手を触れようともされなかった。心の中で、私は、『司祭が言っておられた、一つ目の印だ』と考えていた。翌日またそこに行って、『これはサダカではなくて、贈り物です。どうぞ召し上がってください』と言った。預言者は、友人たちに勧めたうえでご自分も召し上がった。『二つ目の印もあっていた』と思った。

友人の一人が亡くなり、その葬儀に預言者が来られ、私は挨拶をした後その背後をとおり、肩の間にあるはずの印を見ようとした。そしてついにはそれを見ることができた。三つ目の印も、何年も前に司祭が述べていたとおりであった。私は自分を抑えられず、預言者ムハンマドに抱きつき、その印にキスをした。預言者は『どうしましたか？』と言われた。その前に座って、それまでに起こったことを説明した。預言者は大変喜ばれ、他の友人たちにも、その話をするように言われた。」

そう、意地や悪意から逃れて、そのお方を見る者は、このお方を見つけ、その姿に打たれる。過去においても、現在においてもそのことには変わりはない。意地やこだわりを捨てられない者たちが、彼が預言者だと知っているがそれを認められずにいるという点においても、過去と現在の間に変化はないのである。

## なぜ彼らは信じなかったのか

そもそもユダヤ教徒もキリスト教徒も預言者のことを知っていた。しかし悪意と嫉妬が、信仰の妨げとなった。知っていたという面においては、彼らは実にはっきりと、絶対的な形で知っていた。信仰するようになる為には、預言者を一度でも見ればそれで十分という状態だった。聖クルアーンでは、このことは次のように述べられている。

「われが経典を授けた者たちは、自分の子を認めるようにそれを認める。だが彼らの一部の者は、承知の上で真理を隠す」(雌牛章 2/146)

この章で、預言者の名が明記されず、彼、となっているが、それは、経典の民全てが、最後の預言者として、彼、と言われた時点で、それぞれの聖書で名前が出てくるその人を理解する、という印である。彼というのは、もちろん何の疑いもなく、預言者ムハンマドのことである。そして彼らは、彼を、自分の子供以上によく知っていた。ウマルはアブドゥラー・ビン・サラームにたずねる。

「預言者を、自分の子供のように知っていましたか」返事はこうだった。

「自分の子よりもよく知っていました」ウマルが、「どういことですか」と聞くと、

「自分の子については疑いを持つこともありえます。もしかしたら妻が嘘を言っているのかもしれないから。でも、彼が最後の預言者であるということについては、全く疑いを持ちません」と答えたという。

## 嫉妬と悪意

そう、彼らは預言者のことをよく知っていた。しかし、信じることと知っていることは別であった。知っているが、信じてはいなかった。嫉妬と悪意が信仰への妨げになっていた。

「(今)アッラーの御許から経典(クルアーン)が下されて、かれらが所持していたものを更に確認できるようになったが、一以前から不信心の者に対し勝利をお授けくださいと願っていたにもかかわらず一心に思っていたものが実際に下ると、かれらはその信仰を拒否する」(雌牛章 2/89)

この章で、アッラーは、彼らが預言者を認めなかった本当の理由について述べておられる。全ての問題は、最後の預言者がユダヤ人ではなかったというところにある。もし預言者がユダヤの血筋からなるものであれば、彼らの行いは全く異なっていたらというの、全く疑いのないことである。アブドゥラー・ビン・サラームは、預言者のもとにきて、言った。

「預言者よ。一時的に私を隠してください。それから、マディーナのユダヤ学者を全て呼び集めてください。その

席で、私や、私の父についてどのように知っているか、聞いてみてください。皆、好意的なことを答えるはずで  
す。その後で、私は現れて、ムスリムになったことを公表しましょう」

預言者もこれを認められた。アブドゥラー・ビン・サラームは家の中で身を隠し、ユダヤ学者たちが呼ばれた。預  
言者が彼や彼の父についてどう思うかと尋ねると、

「彼と、その父は最も名誉ある学者たちだ」と答えた。再び預言者が尋ねられた。

「彼がもし私を認めたら、それに対して何と言われますか」彼らは  
「あり得ない。決してそんなことはあり得ない」と答えた。その時アブドゥラー・ビン・サラームが姿を現し、ムスリ  
ムであることを宣言した。皆驚き、そのうち、「彼らは最悪の学者たちだ」と、前の言葉を覆した。

### 競争心

ムギーレ・ビン・シューベは語っている。

「私は、アブー・ジャハルとともに座っていた。そこに預言者が来られた。いくつかのことについて説明をし教え  
を説き始められた。アブー・ジャハルは、馬鹿にした調子で、

『ムハンマドよ。もし、この説明とやらを、あの世に行ったときのために、教えを説いたということの証人を求めて  
やっているのなら、ほどほどにしてくれ。私が証人になってやるから、これ以上私のじゃまをしないでくれ』と言っ  
た。預言者はその場を立ち去られた。私はアブー・ジャハルに尋ねた。

『本当に、彼を信じないのですか。』

彼は答えた。『本当は、彼が預言者だということは知っています。ただ、ハーシムの一族とは、昔から競い合い  
があるのです。彼らは、我々のほうが優れていると言ってはばからない。その上、預言者も我々の中からだ、と  
いうのならば我慢できません。』

クライシュ族の者たちが集まって相談し、ウズベ・ビン・レビを預言者の元に派遣することにした。ウズベは行っ  
て、説得し、預言者の布教活動を辞めさせることになっていた。この人物は、アラビア文学をよく知り、裕福であ  
った。預言者の元に行き、彼なりに論理的な攻めをすべく、質問をはじめた。

「ムハンマドよ。あなたと、あなたのお父さんとは、どちらがより価値がありますか」預言者はこの問いに答え  
なかった。というより、このような問いには最もふさわしい、沈黙という形で返事を返したといえよう。ウズベは続  
けた。

「もし、あなたよりお父さんの方が優れているというのなら、あなたのお父さんは、あなたが今価値を認めていな  
い神たちを崇拝していたのですよ。もし、あなたの方が優れているというのなら、ぜひお話しなさい。私もうかが  
いましょう」預言者は「言いたいことは全部すみえましたか」と言われた。ウズベは、はい、と言い、黙ってしまっ

た。預言者は、フッスイラ章を唱え始められた。

「それでもかれらが、背き去るならばいつてやるがいい。『あなたがたに、アードとサムードの(被った)落雷のような災害を警告する』(フッスイラ章 41/13)

に及んで、ウズベは耐えられなくなって、マラリア患者のように震え始めた。その手を預言者の口元に伸ばし、「黙ってくれ、ムハンマドあなたが信じている神への愛にかけて、黙ってくれ」

と言った。そして去っていった。マッカの者たちは、結果を待ちわびていた。アブー・ジャハルは、ウズベの帰りが気に入らなかった。「行ったときと様子が違う」と周りの者と言いついていた。ウズベはまっすぐに家に戻った。彼が聞いた章は、彼に隕石が衝突したかのような衝撃を与えていた。そのうち、アブー・ジャハルがやって来た。ウズベが信仰を選ぶことを恐れたのだった。彼はウズベの弱点を知っていた。自尊心を傷つけられることであった。アブー・ジャハルは行動に移った。

「ウズベよ。聞くところによるとムハンマドはあなたを褒め称え、食事を出し、もてなしたそうではないか。それであなたもいい気になって彼を信じるようになったんだと皆言っている」ウズベは腹を立てて言った。「私が、彼に食べ物を恵んでもらわなければならないような人間ではないことは皆知っているはずだ。このあたりで一番裕福なのは私だ。ただ、ムハンマドの言ったことは私を驚かせた。詩でもないし、予言をする者の言葉のようでもない。何と言ったらいいのかわからないが、彼は正しいことを言う人だ。彼の言葉を聞いて、我々にも災害が起こるのではと怖くなったのだ」

## 預言者に関する吉報

イブラーヒーム(アブラハム)の祈りとイーサー(イエス)の吉報

ある日、教友の一人が預言者に言った。「預言者よ、少し、あなた自身について説明していただけませんか。」その返事の中で、預言者は次のようにおっしゃられた。「私は、イブラーヒームの祈りであり、イーサーのもたらした吉報である。」聖クルアーンでも、二つの章でこのことにふれている。

### 1)イブラーヒームは次のように祈っていた。

「主よ、かれらの間にあなたの印を誦読させ啓典と英知を教え、かれらを清める使徒をかれらの中から遣わして下さい。ほんとうにあなたは偉大にして英明な方であられる。」(雌牛章2/129)

### 2)イーサーの吉報

「マルヤムの子イーサーが、こういつたときを思い起こせ。「イスラエルの子孫たちよ。本当に私は、あなた方に(遣わされた)アッラーの使徒で、私より以前に(下されている)律法を確認し、また私の後にくる使徒の吉報を与える。その名前はアハマドである。」だがかれが明証をもって現れたとき、かれらは「これは明らかに魔術である」といった。」(戦列章61/6)

このように、預言者は、何の前触れもなくいきなり現れたわけではない。そのお方が遣わされるずっと前から、その知らせは存在し、待たれていたのである。

## 旧約聖書の吉報

多くの歪曲がなされてはいるものの、律法や、福音書、詩編には、預言者ムハンマドについて暗示的または明示的、あるいはそれとなく言及した部分が残っている。故フセイン・ジシル氏によると彼は114箇所、そのような言及を見つけ、彼はそれを著作のリサーラ・アル・ハムディヤに引用している。我々はここでいくつかの例を取り上げたい。

### パラン山

ロンドンで1944年に出版されたアラビア語の申命記によれば、  
主はシナイ山より来り／セイルの人々の上に輝き昇り／パランの山から顕現される。(旧約聖書、申命記33／2)

この節は、預言者ムーサー、イーサーとムハンマド(彼ら全ての上に平安あれ)について述べている。シナイ山は預言者ムーサーが、神と語り、そして律法を受け取ったところである。セイルはパレスティナの中の地名で、預言者イーサーが神の教えを受けたところである。そしてパランは、預言者ムハンマドを通して、神が最後に人類に自分自身を明らかにした土地である。

パランは、マッカにある山脈である。それは、創世記において、ハージャルが夫のイブラーヒームによって息子イスマーイールとともに置き去りにされたところとして記されている。ザムザムの泉はその地に現れた。知られているように、また聖クルアーンでも述べられているように、イブラーヒームはハージャルとイスマーイールを、パラン山脈の未踏の土地、マッカ谷に残した。それは律法の明示的な予言によるものであり、その追従者は最後の預言者を待ちわび、そして彼がマッカに現れることを知っていたのである。

前述の節はこのように続く。「主は千よろずの聖なる者を従えて来られる。その右の手には燃える斧がある。」

この節は、約束された預言者が多くの聖なる仲間を持ち、その敵と戦うことを許されている、更には命じられていることを述べている。次の節でも、預言者ムハンマドの到来が約束されている。

### イスマーイール預言者の子孫として

「主はその時私(ムーサー)に言われた。『彼らのいうことはもっともである。わたしは彼らのために、同胞の中からあなたのような預言者を立ててその口にわたしの言葉を授ける。彼はわたしが彼に命じることを全て彼らに告げるであろう。彼がわたしの名によってわたしの言葉を語るのに、聞き従わないものがあるならば、わたしはその責任を追及する。』」(旧約聖書、申命記18～17)

この節からは、以下のことが明らかとなる。「同胞の中から、あなたのような預言者」と言う部分は、預言者がイスマーイールの子孫から現れることを意味する。イスマーイールはイスハークの兄弟であり、彼はイスラエルの民の祖先である。ムーサーのあとに現れ、いろいろな意味で彼に似ている預言者、(例えば新しい法を携えてくることや、その敵と戦いが起こることなど)といえ、ムハンマドのみである。、聖クルアーンも同じ点に言及している。

本当にわれは、あなたがたの証人とする為に、使徒をあなた方に遣わした。われが且つて、フィルアウン(ファラオ)に一人の使徒を送ったように。(衣を纏う者章73/15)

## 預言者は人間のあり方を解明するために遣わされた

アッラーはムハンマドをそれ以前に送られた他の預言者たちと同様、人間のあり方を示すために遣わされた。

「本当にアッラーは、信じる者たちに対して豊かな恵みを授けられ、彼らの中から一人の使徒をあげて啓示を彼らに読誦させ、彼らを清め、また経典と英知を教えられた。これまで彼らは明らかに迷い誤りの中にいたのである」(イムラーン家章3/164)

アッラーは何世代にもわたって、人間に預言者を遣わされた。それは人間が真実に導かれ、罪から清められるためである。アッラーの預言者たちに啓発された人々は、アッラーの御前へと続く道を見つけ、人間として最も高い達成度を得た。イブラーヒーム・ハックは述べている。

「アッラーは、彼御自身が天と地に内包されることのないことを明らかにされている。

彼は心によってのみ、知り到達することのできるお方である」

これが、預言者たちが、人間にアッラーについての知識を説いた理由である。それらをとおしてアッラーは、人の一番奥の感覚、すなわち心、精神、あるいは良心といったもので、感じられることができるのである。その感覚はとても素晴らしいもので、人はそれによってアッラーの偉大さや特性などを把握することができる。考えではアッラーを理解することはできない。哲学的な思考も、アッラーに到達するには決して十分ではない。神の御前に到達することは、ただ心、精神によってのみ可能である。そのために、預言者たちは、アッラーを現す鏡になり得るようにと、彼らの魂を浄化する。預言者ムハンマドは、最後の、そして最も偉大な預言者であり、彼は聖クルアーンとスンナ(預言者の慣行)を我々に残された。だから我々は、それらに従うことによって、預言者たちが遣わされたその目的を達した形で、生きることができるのである。

預言者たちが遣われた神意についてさらに詳しく述べる前に、私は次の三つの点を強調したい。

### 彼らは神によって選ばれた人たちである

第一に、預言者たちは礼儀作法などの点においても欠けるところがない。このことは確実に記述されている。そして、一部の者が考えるように、我々のような普通の人間なのではない。アッラーは彼らをお選びになり、その育成に偉大な注意を払われた。そのため、彼らはその人生を通して常にアッラーの承認を得ようと努めた。以前の預言者たちと同様、預言者ムハンマドも、常に神の御満足を追い求め、彼の最後の言葉は「アッラーよ、最も崇高なる友を求めます」であった。信者たちの母、アーイシャは、預言者の最後の瞬間について次のように述べている。

「最後の瞬間に、私は彼と一緒にいました。それまで、病気になった時はいつも、彼は私に祈るように求め、私は彼の手をとって、その手の恵みによって健康が得られることを願いつつ祈っていました。最後の病のときも、同じようにしようと、彼の手をとろうとすると、突然彼はその手を引いて『アッラーよ、崇高なる友へよ』と祈ったのです」。



第二に、この世界は一度も、預言者としての使命を持ち伝道に生涯を捧げる預言者の後継を欠いたことがなかった。彼らは預言者たちが求めるべきのを求め、預言者たちが説き聞かせるべきことを説き聞かせ、預言者としての任務を行なう際に従うべきことに厳密に従った。善行を喜んで行ない、悪を禁じた。私は預言者たちを遣わされたアッラーの目的を説明することを通して、預言者の道に沿って人々を導こうとした人間たちのあり方に光を当ててみたい。

第三に、死は完全な消滅ではない。それはただい世界が変わるだけのことである。さらに、預言者たちの死は、普通の人の死とは異なっている。精神的段階が、預言者たちのそれよりも低い殉教者たちについてすら、クルアーンでは次のように宣言されている。

アッラーの道のために殺された者を「死んだ」と言うてはならない。いや、彼らは生きている。あなた方が知らないだけなのだ。(雌牛章2/154)

だから、我々は預言者たちについて、彼らは死んだと言うてはいけない。すなわち、預言者ムハンマドは、我々が知っているような死を経験されたのではない。そのお方はただ場所を変えただけで、もう一つの次元、あるいは別の命の段階へと送られたのである。その秘められた能力で、この我々が生きている次元から他の次元へと移ることができる人たちは、時空の異なる次元を経験することができ、そこで異なる被創造物を見ることによって物事を我々とは異なる視点で見ることができる。我々は、今いる流れから物事を判断するが、もし我々がその流れの全てを見るのに十分な高さに昇ったとしたら、昇りにしたがって視野が拡大され、我々の判断力は増すであろう。このように、この能力を身につけた人々は、我々のそばで座っていながら同時にアッラーの御前にいることもあり得る。預言者ムハンマド自身も、この世で我々と共に祈っているその瞬間に、あの世で天使たちの祈りを導いているかもしれない。

エブダールと呼ばれる、聖者の特定の段階がある。彼らは、一人が死ぬとすぐに新しい誰かがそれにかわる。彼らはいつでも預言者に会うことができる。ジェラーレディン・アル・スユティと言う16世紀の学者は「私は目が覚めた状態で、28回、神のお使いを見た」と言っている。

これらの導入を経て、私は預言者たちが遣わされた神意について説明したい。

## 預言者は人間をアッラーへの奉仕へと導くために遣わされた

聖クルアーンでは、次のように記されている。「人間とジン[1]を創ったのは、われに仕えさせるため」(撒き散らすもの章51/56)

我々はただ食べて飲んで繁殖するために創られたのではない。これは我々の生命の自然な事実であり、必然である。我々が創られた主な目的は、アッラーを理解し、アッラーに仕えることである。次のようにも記されている。

「あなた以前にも、われが遣わした使徒には等しく「われの他に神はない、だから我に仕えよ」と啓示した」(預言者章21/25)

「本当にわれは、各々の民に一人の使徒を遣わして「アッラーに仕え、邪神を避けなさい」と命じた。それで彼ら

の中にはアッラーの導かれた者もあり、また迷誤が避けられないものもあった」(蜜蜂章16/36)

### 預言者ムハンマドの違い

アッラーは、我々をアッラーへの奉仕へと導くために預言者たちを遣わされた。全ての預言者は同じ目的のために遣わされた。ただ、違う点は、預言者ムハンマド以前の預言者たちは皆その使命が一つの国と一部の時間のみに限られているのに対して、預言者ムハンマドは人間とジンを含めて全ての世界への恵みである。イブン・マスードは次のように報告している。

「預言者は、ジンたちにも神の言葉を伝えておられる。ある日、神の御使いと私はあるところへいった。彼は私の周りに円を書かれ『私が戻るまでこの円から出てはいけない』と言われた。そして、彼は行ってしまわれ、しばらくすると向こうで騒がしい音がした。私は預言者に何かが起こったのかと心配になったが、預言者は戻るまで円から出ないようにと命じられていたのであった。しばらくして彼は戻られた。私は騒ぎについて尋ねた。彼は答えられた。

『ジン族が、私を信じ、私に忠誠を誓ったのだ。彼らのうちの一部はそれに反対したので、争いがおこった。あなたが聞いたのはその騒ぎである。これは、私の生涯が終わろうとしていることを意味する』

この最後の言葉で、預言者ムハンマドは、このお方が遣わされた目的が人とジンにアッラーへの道を示すことであり、もはやそれを達成したからにはそれ以上長生きすることは無意味だと示唆している。もはやそのお方の任務は残っていないからである。これは、信じる者はこのお方のかけがえのない任務に重きを置き、アッラーにその御使いから教わったように、次のように祈らなければならないことを意味している。

「アッラーよ、死が私にふさわしいのなら、私を死なせてください。そうでなければ、生きることが有意義である限り、私を生かしてください」

### 預言者は人間にアッラーの法を教えた

預言者が遣わされたもう一つの理由は、人々にアッラーの命を伝えることである。日に五回礼拝すること、断食月に断食すること、ザカートを支払うこと、不正な性的交わり、アルコール、ギャンブルの禁止などである。そう、詳細の点で異なっても全ての預言者は同じメッセージを伝えたのである。

預言者なしでは我々はこのようなことを知るすべがなかった。預言者のこの働きは「お告げ」と言われるもので、聖クルアーンで次のように述べられている。

「アッラーのお告げを伝える者たちは、かれを畏れ、アッラー以外の何者をも畏れない」(部族連合章33/39)

「使徒よ、主からあなたにくだされたものを述べ伝えなさい。あなたがそれをしないなら、かれの啓示を述べ伝える使命は果たせないであろう。アッラーは、人々からあなたを守護なさる。アッラーは決して不信心の民を導かれぬ」(食卓章5/67)

アッラーの御使いの使命は、人類を彼らの生活の全ての次元において啓発することであった。だから、アッラーのお告げを伝える上でどんな小さな見落としも許されなかった。それは人類を暗闇に置き去りにしてしまう許されない過ちだったからである。だから預言者ムハンマドは常に、純粋な心と精神の模索を続けていた。

預言者ムハンマドは、アブー・バクルやウマルのような人々には数回神のお告げを述べただけだが、アブー・ジャハルのような人々には少なくとも50回は同じことを説明したに違いない。彼らに会うたびに「アッラーの他に神なし、と宣言しなさい、そして救われなさい」と言われたことだろう。そして彼は人が集まっているところへ行って、この言葉を説かれた。

### タイフでの布教

当時、マッカの周辺の、アラファト、ミナ、ムズダリファ、アカバのようなところで周期的に市が開かれていた。そして預言者ムハンマドは毎年それらの全てを訪問して、同じことを説き続けた。無関心さから始まった反応は、嘲笑、からかい、そして最終的には迫害、拷問へと続いた。それらは耐えられない状態に達し、マッカの多神教徒たちはもはや何の希望も与えなくなった。神の御使いはザイド・イブン・ハリザを連れて「タイフ」の地に行かれた。不幸にも、預言者ムハンマドはそこでも、激しい暴力と恐怖に直面した。タイフの子供たちは、道の両側から彼に石を投げつけた。そのお方の体は、石によって傷つけられていないところがないほどの状態だった。しかし、最終的に彼らは町を脱出することに成功し、は木陰に非難して、出血の手当てをした。預言者ムハンマドは両手を高く差し伸べ、神に懇願された。

「アッラーよ、私の無力さ、弱さ、それから人々に軽視されてしまうことをあなたに訴えます。慈悲深き神よ。あなたは虐げられ、軽んじられた者たちの神であり、私の神であられます。私を誰の元に残されるのですか。私に汚い言葉を投げかけ、近寄ろうとしない人々にですか、私の任務を妨害する人々にですか。しかし、もしあなたが私に対して憤慨されてはいないのであれば、私が味わった苦痛や災いなどは何でもありません。ただ、さらにあなたの慈悲を私におかけください。アッラーよ、あなたの怒りに触れることから、あなたの承認を得られないことから、あなたの光に助けを求めます。あなたが認めてくださるまで、あなたの赦しをお待ち続けます。アッラーよ、全ての力はあなたのものです」

預言者ムハンマドがこのように祈っていると、そのそばに静かにある者が近づいた。そして皿に盛ったぶどうの房を預言者ムハンマドに差し出し「どうぞ、これを召し上がってください」と言った。預言者ムハンマドは、手を皿に伸ばす時「ビスミッラー」(アッラーの御名で...)と言われた。ぶどうを差し出した、アッダースという名の奴隷は、これに驚、尋ねた。「あなたはどなたですか」預言者ムハンマドは答えられた。「私は最後の預言者です」アッダースは彼に近づき、口つけをした。何年も捜し求めた者をその時に見つけ、しかも全く予想しない形で対面したのであった。彼はすぐに預言者を信じ、教えに従った。

もし、この出来事がなければ、タイフの地から預言者ムハンマドは悲しみにくれて戻られるところであった。この悲しみは、そのお方に対してなされたことによるものではなく、たった一人の者にさえ、何も説明できなかったことによるものであった。しかし、もはや預言者ムハンマドは、喜びで宙に舞うほどであった。なぜならアッダースは、このお方の手によって教えを受け入れたからである。預言者ムハンマドは預言者たちの頭であった。

常に、各地で真実を捜し求める心の綺麗な者を探し、それを見つけると、その心をとらえ、教えを説いた。このようにして、信仰する者は毎日少しずつ増えていき、増えるに従って、不信心者は怒りを増していった。今日、この世界で、イスラームに対して、不信心者が怒り狂っているように、その時代にも、彼の周囲の信者が増えるにしたがって、不信心者は怒り狂っていた。この怒りは、彼らを袋小路に追い込み、ついには空の太陽を息で吹き消してしまおうとするかのように、完全にこの神の光を消そうと努め始めた。ここでの太陽はただ一つの例であり、彼のもたらした光は、太陽に光を与える存在である。なぜならその光は神の光であるからである。聖クルアーンの章は、彼らのこの状態を次のように述べている。

「彼らは口先で、アッラーの御光(イスラーム)を消そうと望んでいるが、たとえ不信心者が嫌おうとも、アッラーは彼の御光を全うされる」(悔悟章9/32)

もしアッラーがろうそくに火をともしられたら、それを吹き消すことは不可能である。

マッカがもはや預言者ムハンマドを保護しなくなったため、預言者ムハンマドはマディーナへ移住された。そこで、イスラームへの呼びかけを続けられた。このお方はここでも、ユダヤ教徒たちの敵意と偽善者たちに直面し、10年にわたって戦い続けなければならなかった。

### 別れの説教

預言者としての使命を果たし始めて23年目に、預言者ムハンマドは別れの時が近づいてきているのを感じられた。預言者ムハンマドはそれまでにすでにウムラを行なわれてはいたが「ハッジ」(巡礼)をなされたことがなかった。その年彼はこの神聖な義務を果たされた。預言者ムハンマドはラクダの背に乗ってアラファトの丘を登られ「別れの説教」として知られている説教をなされた。この説教でこのお方は、言っておかなければならない全てのことを言い尽くされようと努められた。裁きのことについて、女性の権利のことについて、利子について、国家と部族における関係についてなど、さまざまなことを説かれた。そして、しばしば聴衆に、アッラーのメッセージを伝達できたがどうか尋ねられた。そのたびに聴衆からは、い、という返事が得られ、預言者は人差し指を上に向けて「アッラーよ、証人になってください」と言われた。

預言者ムハンマドは、任務を果たされた。そのため、心の平安の中におられた。

### 預言者は模範であった

預言者たちが遣わされたその他の目的は、信仰する者への模範となることがあった。アッラーからの啓示である聖クルアーンでは、次のように示されている。

「これらの者は、アッラーが導かれた者であるから、彼らの導きに従いなさい」(家畜章6/90)

ここで考えるべきことは、預言者ムハンマドにさえ、自分より前に遣わされた預言者たちを一人ずつ確認した上で、彼らに従うようにと言われたことである。我々に対しても、聖クルアーンは次のように命じている。

「本当にアッラーの使徒は、アッラーと終末の日を信じる者、アッラーを多く唱念する者にとって、立派な模範で

あった」(部族連合章33/21)

預言者は我々にとって指導者であり、イマームである。礼拝の際に、イマームに従うように、人生の全てにおいてそのお方に従うべきである。なぜなら、真の生き方をそのお方から、そして他の預言者から、我々は教わったからである。イスラームの最初期の信者たちは、預言者ムハンマドにどんな細かいことでもきちんと従っていた。そのために、彼らも、彼らの後に続く者たちも、預言者ムハンマドに、次のように述べてもらえる幸福を得たのである。

「人々にとって、次のような時代が訪れるだろう。すなわち、人々の中からある集団が現れ、彼ら自身に、『あなたの方の中で、預言者を見た者はいるか』と問われるだろう。彼らも、『はい』と答えるであろう。それから、彼らに対して、扉が開かれるだろう。そして、人々から、さらに他の集団が現れるだろう。彼らに対して、『あなたの方の中で、預言者の友となった人を見た者はあるか』と問われるだろう。『はい』と答えるであろう。さらに彼らに、門が開かれるであろう。それから、さらに、人々の中からある集団が現れるだろう。彼らに対して、『あなたの方の中で、預言者の友となった者を見た人と、友達である者はいるか』と問われるであろう。彼らも、『はい』と答えるであろう。彼らにも、城門が開かれるであろう」

さらに、他のハディースでも、預言者ムハンマドは、次のように述べておられる。

「人々の中で最も素晴らしいのは、私と同じ時代を生きた人たちである。それから、彼らに従う者であり、その後には、その者たちに従う者である」

このように述べられることによって、預言者ムハンマド自身に近い時代が上位にあることを明らかにされている。なぜなら、彼らは人生を感情を、考えを、預言者ムハンマドの人生に、感情に、考えに近づけようと、とても気をつけて行動していた。アッラーが模範として選ばれたこのお方に似ることは、目標であるべきであり、事実目標であった。預言者ムハンマドの教友たち、あるいは教友を見ることができた者たち、あるいは教友を見た者たちを見ることができた者たちは、誰よりも注意深かった。彼らは、このために、他の時代に生きた者たちよりも、さらに立派なのである。預言者イーサーは「神聖なる者たちの旗は、弟子たちの手にある」[3]と述べている。この言葉は、預言者ムハンマドのウンマについて当てはまる。預言者ムハンマドは、あるハディースで「私のウンマの宗教学者たちは、イスラエルの息子たちの預言者のようである」[4]と言われている。そう、彼らは、預言者ムハンマドに従うという点で、非常に進んだ段階まで到達しており、その少し先には預言者の段階があるほどであった。

例えて言うなら、信仰の扉を開く時扉の枠さえも取り払って入り込んだウマルは、この最もわかりやすい例であろう。彼は預言者ムハンマドを完全に自分の導師であり、イマームであるとみなし、生き方が全てを彼に見習ったものであった。その点では並ぶ者がいない人であった。ローマやビザンチウムの城壁が開かれ、国民やその支配者が彼のしもべとなるような状態においてさえ、彼はその生き方を全く変えなかった。エルサレム(今日ここは傷つき、問題を抱え、戦争が起こり、イスラーム世界の中で黒いシミのような状態であるが)も、彼の時代に征服されたのであった。完全に軍隊が掌握したのにも関わらず、何人かの司祭は街の鍵を渡すことを拒否していた。「あなたの方の中に、この街の鍵を渡せるような人が見当たらないからだ」と彼らは言っていた。

この状態がウマルに伝えられると、彼はラクダに乗って出発した。自分のラクダは持っていないため、国庫から借りたラクダに乗って出かけた。彼自身の奴隷と交代でラクダをひきながらエルサレムまでやって来た。運命の皮肉で、街に入るところでちょうど奴隷がラクダに乗る番だった。ウマルはラクダから降り、奴隷が拒むのにも関わらず、彼をラクダに乗せた。そして、ラクダをひきながら、街に入ったのである。この光景を見た者は「我々の本に述べられているとおりのお方だ」と恐れ入り、街の鍵を彼に渡した。

ウマルは、争いで傷つき、その臨終を迎えていた時、食べ物も飲み物も取れないほど弱りきっていた。しかし祈りの時間になると、傷口から血を流しながらも、礼拝を行った。そして言った。「礼拝をしない者は、イスラームの教えから何も得られない」。<sup>[5]</sup> ウマルがそうしたのは、そうするようにと預言者ムハンマドから教わったからである。彼は厳密に、自分の師に従い、彼自身もその後の世代に従われるのである。

### 預言者はこの世と来世との均衡を確立された

預言者たちは、この世とあの世の間にバランスを確立するために、遣わされた。当時の修道士たちは、他とは切り離され、孤立した生活を送っていた。また一部の者は、贅沢三昧な暮らしにおぼれていた。そのようなときに、預言者ムハンマドは遣わされたのである。

「アッラーがあなたに与えられたもので、来世の住まいを追い求め、この世におけるあなたの(務むべき)部分を忘れてはなりません。そしてアッラーがあなたによいものを与えられているように、あなたも善行をなし、地上において悪事に励んではなりません。本当にアッラーは、悪事を行なう者をお好みになりません」(物語章28/77)

全ての預言者は、このバランスを確立するために現れた。物質的生活と精神的生活の間のバランス、理屈と魂の間のバランス、この世とあの世の間のバランス、そして道楽と節制の間のバランスである。

「あなたの主の恩恵を述べ伝えるが良い」(朝章94/11)

「その日あなた方は、うつつを抜かしていた享楽について、必ず問われるであろう」(蓄積章102/8)

我々はアッラーから与えられたものに感謝すべきであり、その一方で、我々が楽しんだことについても、必ず問われることを忘れてはいけないのである。

このような教えは、預言者によって彼の仲間たちの心に深く浸透していた。例えるなら、最初のカリフであるアブー・バクルは、断食月のある日、断食を終えて一杯の冷たい水を渡された。それを飲み始めた時、彼は急に涙を流し始め、飲むのをやめた。その理由を尋ねられると、彼は答えた。

「かつて私はある時、預言者ムハンマドと共にいた。彼は手で何かを押しているような動作をし『私から距離をおきなさい』と言っていた。私は

『預言者よ、あなたは何かを遠ざけておられるようですが、私には見えません』と言った。預言者ムハンマドは答えて言われた。

『この世界が理想的な姿となって現れ、その華麗で贅沢な手を私に差し伸べたのだ。私は私に構うな、あなたは私を誘惑できないと言った。それは戻っていったが、あなたを征服することはできなくてもあなたの後の人々を夢中に見せると誓って見せた』今、私は断食を終える時、この一杯の水でこの世が私を魅惑したのではないかと畏れたから泣いたのだ』

アブー・バクルや預言者の教友の多くが、快適に生きることもできたのにも関わらずに、バランスをとれた生活を送ったのである。

## 預言者はアッラーの証人であった

預言者たちが遣わされた更なる理由は、人間が来世でアッラーに対して異議を持たないためである。これに関して、聖クルアーンは述べている。

「使徒たちに吉報と警告をもたらせたのは、彼らの遣わされた後、人々に、アッラーに対する論争がないようにするためである。アッラーは威力ならびなく英明であられる」(婦人章4/165)

いわゆるリーダーに過ぎない人に導かれた人々は、すっかり道をそれていたが、預言者たちの導きによって、真実に達したのである。彼らは神のしもべであり、特別な指名のために創造された。彼らは母の体内にいる時でさえ、すでに預言者だったのである。彼らの出生は変わった出来事によって印付けられ、その人生は完全なハーモニーとバランスを持つシンフォニーに似ていた。彼らの口から出る言葉は快いメロディーのように心に染み透り、完成された歌詞のように全ての存在がそれに耳を傾けるのであった。預言者ムハンマドが奇跡を起こす時は、木と岩までがそれを祝い、彼の呼びかけに答えたと言われている。命あるものと同じく、命を持たないものもまた、彼の到来によってその意味を獲得し、その存在がカオスから抜け出したのである。聖クルアーンでは次のように説明されている。

「何ものも、彼を讃えて唱念しないものはない。だがあなた方は、それらがいかに唱念しているかを理解しない。本当に彼は忍耐強く寛容であられる」(夜の旅章17/44)

宇宙にはアッラーの存在と唯一性を示す、とてつもない協調がある。何事も、意味もなく創られてはいない。他の全ての被創造物と同様に、人間も何の目的もなく創られたのではない。聖クルアーンは宣言している。

「人間は何の目的もなく、そのまま放任されると思うか」(復活章75/36)

もし預言者たちが遣わされていなかったら、人間は来世で罰を受けることについて論争を戦わしたかもしれない。しかし「われは警告のため一人の使者を遣わさない限り決して懲罰をくださない」(夜の旅章17/15)と聖クルアーンで述べられているように、アッラーは、預言者たちを遣わされるまでは彼らを罰しないが、良いことと悪いことを区別するよう、預言者が遣わされたのであるから、人間はもはや、神の罰や報酬に対しての論争をしてはいけないのである。

## 全てアッラーに従う

預言者たちは誰一人として、自分でこんなシステムを作ってみようかと考えてその仕事を始めたのではない。アッラーが、人間の中から選ばれた者を預言者とされ、その時がくると、預言者として創造されたその人に、完全に預言者としての責任と任務を知らされるのである。彼も、自分が預言者であることをそこで宣言する。それぞれの預言者に、各々にふさわしいアッラーの命令がくだされる。それに従って生き、それが終わるとこの世を去る。我々が生きるために空気や水や食物が不可欠であるように、預言者たちにとってもアッラーの命が必要となる。彼らはアッラーの風によって育ち、彼らの上には常にその風が吹いている。その風が続く限り、彼らは人々のそばで活動を続ける。その風がやむと、もう一つの世界へと飛んで行く時を待つことになる。

彼らは全てにおいて完全にアッラーに従う。アッラーが、彼らに語らせたいことが何であれ、そののみを望まれる形で語る。彼らがもたらす教えはアッラーによるものであり、彼らはこのような形でその任務を果たさなければならぬのである。

その任務を行なう際は、相手が承認しようと、拒否しようと、彼らには関係がないことになる。彼らの任務はお告げを知らせることに過ぎない。そのため、相手が彼らに何をしようと、何を言おうと、彼らは自分の道から外れることはない。そしてこの活動から、物質的な何かを求めることは全くない。「片手に太陽を片手に月を与えられたとしても、私はこの呼びかけをやめないだろう」[1]という姿勢が彼らの基本である。

## 見返りを求めない

預言者たちはその任務から、物質的、精神的見返りを全く求めない。聖クルアーンでは、彼らのこの特質についてさまざまな形で述べられているが、全てに共通する点は「我々の報酬はただアッラーから与えられる」(参照 詩人たち章26/107、125/7、143/5、162/4、178/80)というものである。我々は、たとえ物質的な見返りを期待しなくとも、少なくとも精神的な見返りを期待することがあり得る。しかし預言者たちはそれすらも求めない。彼らがやっていることは全て、アッラーの命であるからやっているのである。たとえ地獄の火に焼かれるようなことになったとしても、彼らはその考えを変えることもなく、その任務を続ける。

彼らにこの困難な任務を続けさせるのは、天国への憧れでも地獄への恐怖でもなく、ただアッラーの承認を得られるということのみである。この点で最も抜きん出ているのは預言者ムハンマドである。この世に生を受けた瞬間から「私のウンマ(預言者の共同体)よ」、と呼びかけたとされる預言者ムハンマドは、最後の審判の日にも「私のウンマ、私のウンマ」と言われるに違いない。天国への扉が大きく開いて、今まさにそこに入らんとする時でさえ、預言者ムハンマドはそのウンマをそこへ導くために、審判の日の最も苦しい状態をも、ものともせず、待つことを選択されるだろう。彼らはただアッラーの承認を得ることのみを考える。その他のことに対しては、その心は開かれないのである。

私たちのこの時代において、そもそも預言者の任務である布教のための活動をする者は、特にこの点に注意を払い、気をつけて行動すべきである。言葉が影響力を持つために必要なのは文学的に美しく語るのではなく、誠意を感じさせることである。そのためにも、見返りを期待しないことが必要である。聖クルアーンでも次のように記されている。



「あなた方に何の報酬も求めない人たちに従いなさい。彼らは導きを得ている」(ヤー・スーン章36/21)

あなた方が従うべき人を選ぶ時にはよく考えてほしい。そのような人に従ってほしい。そして昼も夜も、常にその奉仕のために愛情を持ち続けてほしい。後の世代を育てるために努力し、その時代に最も合った形でそれを実行する。その見返りは求めず、心の中にその欲求の影さえ存在してはいけない。あなた方自身にこのような指導者を見つけ、その後に従ってほしい。

預言者ムハンマドは、見返りを求められなかった。人生を通して、大麦のパンですら、その空腹を満たそうともなさらなかった。時として、その幸福に満ちた家では、料理のための火もおこされないまま何日も、何週間も、何ヶ月も過ぎることがあった。アブー・フライラは説明している。

「ある日、私は預言者ムハンマドのところに出かけた。預言者は座ったまま礼拝をされていた。礼拝が済んでから、私は尋ねた。

『預言者よ、病気になるのですか』すると彼は答えて言われた。

『いや、空腹のためです、アブー・フライラよ』私は泣き始めた。この世界さえ御自身のために創られた、アッラーの最も愛されるしもべが、空腹のために立ち上がる力もなく、座ったまま礼拝をしているのだ。私が泣いたのを見て、預言者ムハンマドは慰めてくださった。

『泣くことはありません、アブー・フライラよ。この世界で空腹の苦しみを味わう者は、あの世でのアッラーの罰から安全な状態を得るでしょう』

マディーナのムスリムの一人である女性が、敷布団のようなものを持ってきた。聖アーイシャは、それを預言者がいつも休まれる、草で編んだ敷物の上に敷かれた。家に戻ってそれを見られた預言者ムハンマドは、それが何であるかを尋ねられ、その答えを聞いて、言われた。

「アーイシャよ、それを返してきなさい。私がそれをほしがってれば、アッラーは必ずそれをお与えになつたらう、しかし私はそれを望まない」

そのお方は、もし望みさえすれば、非常に楽な人生を送ることもできたであろう。しかしそれを望まれなかった。

ある日、天使が訪れて、アッラーの挨拶を伝えた。それから尋ねた。

「あなたは皇帝の預言者になりたいか、それとも奴隷の預言者になりたいか」。ジブラーイルが、助けにやって来て、預言者に伝えた。

「謙遜しなさい」預言者ムハンマドは答えを決めて、答えられた。

「ある時は空腹に苦しんでも、別の時には食事できたことに満足できる、奴隷の預言者であることを望みます」

彼は奴隷や召使いと共に座り、共に食事をとられた。ある女性はそれを見て、

「奴隷のように食事をしている」と言った。預言者ムハンマドは言われた。

「私以上にいい奴隷がいると言うのか。私はアッラーのしもべである」

預言者ムハンマドの人生は常にこのようであった。その他の例を挙げた何千冊もの本があるので、ここではこれ以上の説明はそれらの本に譲ることにしよう。このように、このお方をはじめとして、全ての預言者たちは何の報酬も要求することなく生き、彼らの行いに対して、この世でも、あの世でも、一切の見返りを期待しなかった。彼らの言葉に信頼が置かれたのはまさにそのためである。だから、自分の言葉を信頼してほしいと願う人は、まずその奉仕に対して何の見返りも期待しないことを学ぶべきである。

## 純正である

イフラス(純正)とは、その実行したこと全てがアッラーのために行なわれ、また実行しなかったこと全ても、アッラーのためにそれを行なわなかった、ということの意味する。預言者たちはその任務にかかった時点ですでに、イフラスの状態であった。普通の人間も努力によってイフラスに達することはできるが、その達することのできるイフラスの最高の段階は、預言者たちにとってほんの初歩の段階に過ぎない。彼らはまさに、イフラスの真髄に達していた。聖クルアーンでも、彼らのこの特徴について述べられている。「またこの啓典の中で、ムーサーについて述べよ。本当に彼は誠実であり、使徒であり預言者であった」(マルヤム章19/51)

聖ユースフ(ヨセフ)についても「本当に彼は謙虚で純真なわがしもべである」(ユースフ章12/24)

さらに、預言者ムハンマドについても、述べられている。「本当にわれは、真理によって、あなたにこの啓典をくださった。それでアッラーに仕え、信心の誠を尽くせ」(識別章39/2)「言ってやるがいい。『私はアッラーに誠を尽くします』」(識別章39/14)

忠誠の理由は、それがアッラーの命であるからである。最後にはアッラーの承認を得ることがある。その報酬は、あの世でアッラーがお与えになるのである。それは人生を通して徹底され、全ての行動からそれが伝わる。

この時代の思想家サイド・ヌルシイも言われている「アッラーのために仕事を始め、アッラーのために働き、その承認を得られるように行動しなさい」という考えは、誠実であることへの定義と、その重要性を示しているのである。

イフラスとは、人間が誠実で、その誠実さを増すことを意味する。イフラスである人は、その人生において正しい道からそれてしまうことはない。常に上向きで、意識をはっきりと持っている。そのため、イフラスである人々は、仕事に着手した時の謙虚さを最後まで保っている。

人間の歴史で、イフラスの最高の地点に達した唯一の人が、預言者ムハンマドである。教えを広め始めた時

の謙虚さと、マッカを征服した時の謙虚さとの間に全く差はなかった。マッカは平和的に占領された。一部の争いはあったとしても、それを全体のものと考えるのは誤りである。預言者ムハンマドは、何年も前に追い出されたこの土地へ入る時、司令官のような態度はとられなかった。ラクダに乗られていて、その上、頭を深く下げられておられた。

預言者ムハンマドがマディーナにおられた時も、その態度は変わらなかった。教友たちはこのお方が姿をお現しになると、立ち上がって迎えた。それは当然のことであった。しかし御自身はこのようなことを好まれなかった。常に、彼らに対してそのようなことはしないようにおっしゃられた[3]。このように、預言者ムハンマドは、その価値ある預言者としての任務を始めた時のまま、同じ謙虚さのまま、終えられたのである。これは、非常に優れた成功ということである。

そのお方は、人生を通して、ただアッラーに仕えられた。その心はただアッラーに関わる探求に満ち溢れていた。その目はただアッラーの作品を見ていた。全ての感情は、それからもたらされる喜びで活気づき、それが溢れた。尽きることのない愛をもって、常に「アッラーよ」と言われた。彼はイフラスであったからである。

このお方の素晴らしい感情(イフサーン)も、これにまた別の特性を形成した。アッラーを今そこに見ているかのような形で、仕えられたのである[4]。何かにとえてこれを説明するなら、人々がマッカの方向に礼拝するのに対して、預言者ムハンマドはカアバ神殿の中で礼拝されるということである。

## 素晴らしい中源

預言者たちは、その活動に入る時、決して声高に主張することはなかった。彼らは人々に対して、立派な助言と知識をもって働きかけた。聖クルアーンでも、預言者ムハンマドに対して次のような記述が見られる。

「英知とよい話し方で、あなたの主の道に招け。最善の態度で彼らと議論しなさい」(蜜蜂章16/125)

彼らに対して、その存在の理由と創造の神秘をやさしく、説得力のある形で説明しなさい、相手を傷つけることなく、心から納得できるようにしなさい。

預言者たちは、固執したり、詭弁によってその任務を強行したりすることは全くなかった。当時も今も、思慮の足りない者がこのような形が有効であると考え実行し、それがうまくいったためしはない。アッラーも、彼らにこのような行動はとらせなかった。彼らの任務は、役に立つ知識と、素晴らしい助言という形で、教えについて説明し、それを広めることであった。人間はただ頭で生きるのではない。心、精神がある。そしてこれらは全て、満足することを求めている。それで預言者たちは、人間たちをそれに従って導く。そしてその形で、彼らを輝かせる。人間の心や精神に重きを置いて行なわれるこのような忠言は、結果として、全ての疑いを晴らし、相手を信仰に導く。

預言者たちが導いた人々は、物事に対する見方が変わる。心の目を持つことになるのである。他の人々が見ることのできないものを見、知るようになる。アッラーに対しての疑惑を抱く人々に対して、笑ってやり過ごすことができるようになる。なぜなら、彼らの心に根づいた知識は、もはや何の疑惑も残さないからである。

アッラーは、彼らが1を知るとそれを一千とされる。知識を獲得させ、知らないことを知らせる。ハディースで次のように述べられている。「誰であれ、その知っていることに従えば、アッラーは、彼らがまだ知らないことをもお知らせになる」。アッラーよりもたせられる精神的状態は、彼らの心を宇宙のように広げさせる。そして自分が知っていることに従うことによって、彼らの考えも高まる。

「よい言葉は、彼の元に登っていき、正しい行いはそれを高める」(創造者章35/10)

さらには彼らの中に、聖アリーのような人も育てていく。彼は「私は天国や天使など、今見ることのないことを見ることができるようになったとしても、これ以上に信じることはないだろう」と言っていた。つまりそのレベルで信仰しているということである。このような言葉は、神への感謝のために、その恵みを明らかにする目的で述べられたものである。預言者ムハンマドは、アッラーの知らせにより、アリーを最後の審判の日までに訪れる信者の長として、宣言した。彼を喜びで一杯の状態にされた。美しく、こまやかな心を持つ女性たちを振りきり、預言者の庭の花、聖ファーティマと結婚した。そしてこの幸せな結婚により、二人の立派な人間、聖ハサンと聖フセインが世に現れた。さらに、アッラーが愛された者の中で最も高いところに位置される者たちも、彼らの教え子たちの中から現れたと言える。聖アリーがこのようでおられたのと同様、その金の鎖につながった者たちは皆、正しい道からそれることのない信者であった。

彼らにおける、アッラーは自分たちを愛されておられるという感情は、信じること、信じたことに従ったことによる結果であり、こういった直観的真理は信仰とイスラームの結果として、アッラーを見ているかのような信仰行為を行なう者に芽生える。

「われは今、あなたから覆いを取り除く。今日は、あなたの視覚は鋭敏である」(カーフ章50/22)

彼らはまだこの世にいるうちに、この節に従うのである。この直観的真理をその良心の内に感じ始めた瞬間に、もはや外の世界は色あせ、内面の感情が人間を支配する。なぜなら、アッラーは彼自身を人間の心の中に感じさせるのであり、外で探すことの必要がなくなるのである。その教え子たちに、この感情と考えを抱かせられた預言者は、そのメソッドとして、よい形で忠言することを選ばれ、その布教もそれに従って行なわれた。我々がこのテーマで明らかにしたかったことは、この節に、最も明らかな形で述べられている。

「われはあなた方の一人をわが使徒として遣わし、われが印をあなた方に読誦して、あなた方を清め、また啓典と英知を教え、あなた方の知らなかったことを教えさせた」(雌牛章2/151)

私は預言者ムハンマドのこの点における細かい注意の払い方と、そのメソッドを今までにもさまざまところで説明してきたので、ここではこれ以上の言及はしない。ただ、それらを2~3の文章としてまとめるのであれば、次のようになるであろう。

預言者ムハンマドは、常に相手の状態や段階に応じて、その頭と心と精神を満足させる形で、過不足なく、語られた。そのお方の語られるのを聞いた者はほとんどが心から納得した。ワリド・ビン・ムギーレやウズベ・ビン・レビアのように、預言者ムハンマドが語られたことを正しいと認めながらも、そのプライドの虜となって信仰しなかった者たちも、恐怖に取りつかれていた。否定し続けたのは、彼らの欠点によるものである。時として、詩人

アーシャーのように、全てを認めながらも、昔からの習慣を捨てられず、特別扱いを求める者もあり、もし信じることなく死んだとすれば、これは、アッラーが彼らに定められた運命だと言うことができる。

## アッラーの唯一性への呼びかけ

聖クルアーンでは、多くの預言者たちが、その呼びかけで、アッラーの唯一性に重きを置いたことが、次のように記されている。

「私の人々よ、アッラーに仕えなさい。あなた方には、他に神はないのである」(フード章11/84)

全ての預言者の呼びかけは、この偉大な真理によって始まり、終えられる。それぞれに異なる時と場所で、それでも預言者たちはこの点において一つであった。そして常に同じことを述べたということは、全く疑う余地もなく、彼らは、自分たちの考えや思想ではなく、アッラーから送られたメッセージを伝えていたということである。なぜなら、同じテーマを別々の能力を持つ人たちが、しかもさまざまな場所や時代に生きたにも関わらず、同じ形で語ることは、あり得ることではないからである。あなた方は、同じ考えを持ち、しかも、同じ時代に生きた人たちの中にも、些細な点においてかなり大きな違いがあることを知っているであろう。

人間が考えたことにおけるこのような違いは、アッラーより遣わされた人がもたらす考えにおけるこの統一性と比較すると、明らかである。そう、彼らにおける統一性に加えて、彼らが皆アッラーが唯一の存在であることを説くということは、預言者ムハンマドが「私と、私以前にきた預言者たちの語った最も重要なことは、『ラーイーラーハ イツラッラー、ワフダフラーシャリーカラフ』(アッラーの他に神はない、彼は唯一であり、仲間はいない)である」と言われたその理由である。

## M.F.ギュレンについて

### 著者について

M.F.ギュレン先生は「ホジャ・エフェンディ」とも呼ばれて、非凡の学者である。彼はトルコ東部のエルズルム市で1938年に生まれた。エルズルムの宗教学校を終えた後、彼は説教者および教師としての免状を得た。彼は私立学校を開くよう人々を導きトルコの教育の改善のために貢献したが、それに加えて、社会における相互理解と寛容の為に熱心な努力を続けたということでも評価されている。1960年代に始まったこの社会の改善のための努力は、彼をトルコで最もよく知られる人物の一人とした。社会問題解決と人々の精神的なニーズを満たすための、彼の疲れを知らない献身によって、世界各地に多数の支持者がもたらされた。

素朴な外見に対し、彼はその思想と行動の点で斬新であった。彼は全ての人々を対象とし、また不信心と不正さ、逸脱を強く憎む。彼の信仰と感情は心からのものであり、彼の思考と問題解決のためのアプローチは知的で、理性的である。愛情と熱心さ、感情の生きたモデルとして、彼はその思想や行動や問題の扱い方において非常に均衡の取れた人である。

教育を終えた後、1958年、彼はエディルネで教え始めた。この期間、教育と同様彼は宗教的、社会的な奉仕も行なった。兵役終了後エディルネで更にしばらく教え後、彼はトルコ第三の都市であるイズミルに移った。こ

れは彼のターニングポイントとなった。子供時代から彼は宗教生活のための奉仕を行っており、彼はイスラーム教徒のみではなく全ての人間の状態に深い関心を抱いていた。イズミル滞在中、彼は教えの場を一箇所にとどめることはしなかった。彼は町から町へと移動を始め、ダーウィン説からイスラームにおける社会正義までにいたる講義を行なう為であった。彼は大きなトルコ風カフェなど、人が集まる場所に出かけ、そこで彼らに自らのメッセージを伝えたのだった。「よい者には、そのよさをほめてやりなさい。信じる心を持っている人を認めなさい。信者に対して親切に振舞いなさい。信じていない人にとに対してのアプローチは十分の礼儀正しくあるべきであり、それによってねたみや憎しみを溶かすことができるであろう。メシアのように人々をあなたの息でよみがえらせなさい。」

M.F. ギュレン先生は若い世代が純粋な精神と知識と恒常的行動を伴う知性的啓発によって団結することを望んできた。宗教と社会科学における非凡の知識と物質科学の原理についてよく知っていたので、彼は教え子たちにその全てを教えることができた。イズミルでの彼のクラスに参加した最初の教え子たちは、彼のその考えの為に尽くすよみがえった世代の前衛となった。

1960年代に M.F. ギュレンの意見に賛同する形で集まったこの小さなグループは、これまで急速に、着実に人数を増やしてきた。彼の涙やその誠実さ、利他主義、そして愛に感銘を受けた世代は、物質的な見返りを求めない奉仕を行ない、それは現在も続いている。この奉仕には説教、教育、世界各地への私立の教育機関の設立、本、雑誌の出版、テレビやラジオの放送、そして貧しい生徒たちの為の奨学基金といったものが含まれる。彼らは政治にはかかわらず、また政治的野心などもない。彼らはこれまですでに世界各地に300を超える高校や大学を設立し、運営してきた。それはイギリスからオーストラリア、アメリカ、さらにはペテルスブルグやモスクワのようなロシアの都市、シベリアから南アフリカにまで及ぶものである。また、彼らはテレビ局をも運営し、それはトルコからインド、中東まで広い範囲を網羅している。

「愛情に満ちた人たちのみが、幸福で啓蒙されたこれからの世界を作っていくことができる。彼らは愛をこめて微笑み、彼らの心は愛に満ち溢れ、彼らの目は愛情とこの上なく優しい人間的感情がある。彼らは、日の出や日没、また星の輝きといったものからも常に愛のメッセージを受け取るのだ。」

M.F. ギュレンに関して英語のホームページもありますので、参考にしてください。

